

10月第4週の礼拝説教

- 日 時：2022年10月23日（日）10：30—11：30 降誕前第9主日
- 説 教：保科けい子 牧師
- 説教題：「引き渡された主」
- 聖 書：ヨハネによる福音書19章1—16節（新約p206）
- 讃美歌：205「ひとよ、汝が罪の」300「十字架のもとに われは逃れ、」

先週の金曜日10月21日に、私の恩師のご葬儀が母教会でありました。私は参列しませんでした。YouTubeでライブ配信されましたが、私はライブではあまり真剣に視聴せずに、夕方になってから録画を見ました。私が教会生活を送っていた頃は古い木造の会堂でしたが、1991年3月に現在の会堂に建て替えられています。しかし、ご葬儀の映像から流れてきたのは、まさしくかつて私も与っていた主日礼拝そのもののように思える礼拝でした。歌われている讃美歌一つをとってみても、まるで私自身がある場にいるような錯覚に陥るほど、懐かしい印象を受けました。本日の礼拝後に、私たちの立川教会では「葬儀」についての懇談会をいたしますので、その時に、主日礼拝と葬儀についての関連をお話したいと思います。

さて、本日は使徒信条と関連付けて聖書を読む8回目になります。今日の箇所は第二部の主イエスに対する告白の中の「**ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、**」という文言について、ヨハネによる福音書19章1節から16節を取り上げたいと思います。この箇所は、一般的には受難節によく読まれるところです。なぜなら、まさに主イエスが「**ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け**」られる場面が描かれているからです。ところで、今日の聖書箇所には不思議なところがあります。ピラトは基本的にはこのイエスという男をローマに反逆する力もない無力な人間だとみなしていました。そしてまた、その男を訴えているユダヤ人たちを心の底では見下していました。ローマに支配された愚かな劣った民族であると考えていたからです。一方でユダヤ人たちもまた、ピラトを見下していました。自分たちイスラエル民族こそ神に選ばれた民であって、ピラトなど神に選ばれることのない異邦人にすぎないと位置付けていたのです。そのように、ここに出てくる人たちはみな、それぞれに相手を見下していたのです。そのような中で、ピラトの部下である兵士たちは主イエスに茨の冠をかぶせ紫の服をまとわせて、「**ユダヤ人の王、万歳**」と言って平手で打ち、なぶりものにしたとあります。「紫」は王様の服の色で、とても貴重なものでした。ここでは勿論それに似た色のボロボロ布をまとわせたということですから。兵士たちは主イエスをユダヤ人の王に見立てて、嘲笑い、侮辱したのです。他の福音

書では、主イエスがこのような侮辱を受けたのは、十字架の死刑の判決が下された後とされています。しかし、ヨハネはそれを裁判の始まる前にピラトの命令によって行われたこととしています。それはピラトの思惑によることだったと解釈している方もおられます。彼は鞭で打たれ、侮辱を受けてボロボロになったイエスという男をユダヤ人たちの前に引き出してその姿を見せることで、ユダヤ人たちに「もう十分だ」という思いを持たせ、イエスを釈放しようとしたのではないかと考えられています。

しかし、普段は見下しているユダヤ人の一人にすぎない男であっても、同胞から訴えられてぼろぼろにされ、みじめな姿をさらしている主イエスに関しては、8節で「**ピラトは、この言葉を聞いてますます恐れ**」たとあります。その言葉とは、7節でユダヤ人たちが「わたしたちには律法があります。律法によれば、この男は死罪に当たります。神の子と自称したからです。」と言った言葉です。異邦人であるピラトにとっても「神の子」という言葉は神聖な響きをもつものだったと思われます。また、「**ますます恐れ**」たということから、もともと、ピラトには恐れがあったと思われます。なぜならピラトにとっては、主イエスはユダヤ人の同胞から陥れられた哀れな人間に過ぎないと感じられる反面、今日の聖書箇所の前前の18章28節から38節部分で記されている主イエスとのやり取りから、どこか不思議なものをも感じ取っていたからだと思われます。ですから9節で「**お前はどこから来たのか**」と主イエスにピラトは問いかけるのです。それは単純に出身地を聞いているのではなく、お前は本当に神的な存在なのか、お前の由来は一体何なのか、と問うているのです。このことこそ、ヨハネ福音書の主題の一つです。ヨハネによる福音書は、3章16節ですでに主イエスがどのような存在であるかを記しています。「**神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである**」と語り、主イエスこそ、神がこの世に遣わして下さった独り子なる神であり、私たちに永遠の命を与えて下さる救い主なのだ、ということを宣言しているのです。ですから、主イエスの正体は何かというピラトの問いは、この福音書の中心主題に迫っているのです。けれども、この問いに主イエスは「**答えようとされなかった**」とあります。この沈黙が、さらにピラトを動揺させていきます。そして、主イエスは11節で「**神から与えられていなければ、わたしに対して何の権限もないはずだ。だから、わたしをあなたに引き渡した者の罪はもっと重い。**」と語られます。この言葉によってピラトは、政治犯でもない主イエスをユダヤ人たちがローマの権力を利用して殺そうとしていることを確信します。彼は、主イエスがどのような存在であるかははっきりとは分かりませんが、自分の持っているローマの権力によって殺してよい相手ではないことを感

じたのです。ピラトはユダヤ人たちとは異なり、宗教的な人間ではありませんでしたが、主イエスに対して本当の恐れを感じたのです。

しかし、事態は、ピラトの思惑とは異なる方向に流れていきます。主イエスを釈放しようと努めたピラトに対して「もし、この男を釈放するなら、あなたは皇帝の友ではない」とユダヤ人たちが叫んだからです。この言葉は、皇帝の臣下であるピラトにとっては弱いところを突かれるものでした。その結果、主イエスは最終的な裁判の場へと引き出されます。14節によれば、「それは過越祭の準備の日の、正午ごろであった」とあります。「過越祭の準備の日」とは、過越の小羊を屠り過越の食事の準備をする日です。ヨハネによる福音書は、過越の小羊が屠られるその日の正午に主イエスの裁判が行われ、その午後に十字架につけられたと語っているのです。それはまさに、過越の小羊が屠られる時です。遠い昔、主がイスラエルの民を奴隷の苦しみから救うためにエジプト人を撃ったことがありました。主がその地を巡るとき、イスラエルの民が過越の小羊を殺しその血を鴨居に塗ることによって、目印となり主が過ぎ越していかれたという出来事を決して忘れないために、過越祭が守られていたのです。そのことを踏まえながら、かつて、イスラエルの民のエジプトでの奴隷の苦しみからの解放と救いが実現したように、主イエスが過越の小羊として十字架にかかって死なれたことによって、私たちの救いも実現したのだ、とヨハネによる福音書の著者は語っているのです。

ピラトは「見よ、あなたたちの王だ」と言います。ここにはピラトの腹立たしい気持ちが反映されています。ぼろぼろのみじめな姿をしている男を敢えて「あなたたちの王だ」といって、ユダヤ人たちへのせめてもの侮蔑の気持ちを表しているのです。それに対して、ユダヤ人たちはますます興奮し、「殺せ、殺せ。十字架につけろ」と叫ぶのです。そして忌み嫌っているはずのローマ皇帝まで引き合いに出してきて「わたしたちには、皇帝のほかには王はありません」とまで言うのです。主イエスに十字架の死刑の判決が下された裁判はそのように行われました。そこにはピラトの、またユダヤ人たちの弱さと罪が渦巻いています。そしてそのために彼らが陥っている恐れと悲惨さが描き出されています。その弱さも罪も、恐れも悲惨さも、私たち自身の現実です。主イエスの十字架の死は、ピラトとユダヤ人たちの姿に描き出されているような私たち自身の弱さと罪、恐れと悲惨とがもたらしたもののなのです。その深い意味が16節の「ピラトは、十字架につけるために、イエスを彼らに引き渡した。」という御言葉に記されている、と私は思っています。「引き渡した」という表現は、この箇所とすでに読んできた11節の主イエスの語られた「だから、わたしをあなたに引き渡した者の罪はもっと重い。」の2回出てきています。この引

き渡すという行為によって、主イエスの十字架の死が成し遂げられ、私たちの救いも実現したのです。使徒信条が、「**ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、**」と、歴史上の人物として確認できる人物の名前を挙げ告白していることの意味は、現実の中で、私たちもまた自分の弱さと罪に縛られ恐れと悲惨さに捕えられて、自分の都合の良いように主イエスを十字架の引き渡してしまう存在であることをしっかりと見つめる必要があることを教えています。けれども、同時にまた、そのためにこそ、神の独り子を与えて下さった神の愛が注がれていることをも知らされるのです。